

令和5年 1月 25日

十文字学園女子大学大学院
人間生活学研究科 研究科長
志村 二三夫 殿

学位論文審査報告書

学位論文審査願いが提出された下記の論文について、厳正に審査した結果、論文審査結果の要旨に示されたように（合格、~~不合格~~）と判定した。

記

学位論文の題目： FACTORS OF CHILDHOOD OBESITY IN VIETNAM

ベトナムにおける小児肥満の要因

学位申請者：（氏名）NGUYEN MAI PHUONG グエン・マイ・フォン（学籍番号 120DA001）

指導教員：（氏名・職位）山本 茂（教授）

主査（氏名） 岩本 珠美（教授）

副査（氏名） 加藤 則子（教授）

副査（氏名） 山本 茂（教授）



論文審査結果の要旨

学位申請者氏名： NGUYEN MAI PHUONG グエン・マイ・フォン

論文題目： FACTORS OF CHILDHOOD OBESITY IN VIETNAM

ベトナムにおける小児肥満の要因

背景と目的:

近年、ベトナムでは小児肥満の増加が著しい。国民栄養調査の結果によると、2010年から2020年までの10年間で、5歳から19歳の子供の過体重・肥満の割合は、全国では8.5%から19%に、都市部では15.4%から26.8%に、ほぼ倍増した。一方、日本人の子供の過体重・肥満率は約10%で、世界で最も低い国の1つである。肥満の主原因は、エネルギー摂取量が消費量を上回ることである。ベトナムは、1975年に戦争が終わり、1990年代に入って人々は十分に食べることができるようになった。そのために、2000年に入ってからの子供肥満の著しい増加は、過剰のエネルギー摂取量が原因と考えられ、その調節にほとんどの注意が払われてきた。しかし、近年のライフスタイルの変化は、身体活動量を著しく低下させているように見える。そこで、本研究ではエネルギー摂取量と消費量の両方の視点から肥満の原因を調査し、ベトナムと日本の両国の子供で3つの研究を実施した。

研究 1) ベトナムの子供たちの食事摂取と身体活動に関する研究: ハノイ近郊の公立小学校に通う10歳の子供134名(男児73名、女児61名)を対象に横断研究を行った。身長と体重を測定した。食事摂取量は、24時間食事想起法によって7日間調査した。子供たちの身体活動レベルは、各種活動強度(METs)について時間調査を7日間行い、1日当たりの平均活動強度を計算した。調査は一般に3日間が多いが、7日間は信頼度をより高めると考えられる。

要約と評価) ベトナム人被験者の過体重および肥満率は30.6%であった。非肥満群と肥満群の7日間の平均エネルギー摂取量は類似しており、それぞれ 1895 ± 298 および 1881 ± 296 kcal/日であった($p > 0.05$)。平均身体活動レベル(PAL: 一日の平均METs)は、非肥満群で1.48、肥満群で1.39であった($p < 0.001$)。エネルギーに差がなかった原因として、肥満している子供達は本人、家族などから摂取量を抑制する指示がでていた可能性を排除できない。もしそうだとすると、さらに低年齢の時に過剰摂取への注意が必要になる。

研究 2) ベトナム人と日本の子供たちの食事摂取量と身体活動の比較

2-1) 日本人小児の食事摂取に関する研究: 岡崎市の10歳児60名(男子31名、女子29名)を対象に栄養調査を実施した。身長と体重を測定した。食事摂取量は、平日と週末の24時間食事想起法によって3日間測定した。

要約と評価) 日本の岡崎市における過体重・肥満の割合は 11.6% で、ハノイの約 2.5 分の 1 であった。エネルギー摂取量は、ハノイと岡崎でそれぞれ男子 1809±234 と 1876±260 kcal/日、および女子 1959±327 と 2017±360 kcal/日で有意差はなかった ($p>0.05$)。

2-2) 東京近郊の日本人児童(男児 35 名、女児 43 名)の身体活動レベルを、各種活動強度 (METs) について時間調査を 3 日間行い、1 日当たりの平均活動強度を計算した。

要約と評価) 活動強度は、ベトナムの子供 (1.42) よりも日本人の子供 (1.54) の方が高かった ($p<0.001$)。日本人の子供が中程度から激しい身体活動に費やした時間は、ベトナムの子供の約 2 倍であった。

本研究は、ベトナムの子供たちの急激な肥満率の増加の原因として、従来のエネルギー摂取量のみでの調査ではなく、エネルギーの摂取量と消費量の両方に焦点を当てている。さらに、日本の子供の肥満抑制が世界でももっとも成功していることから、両国の小児で比較研究を進めた結果、ベトナム小児の肥満の原因としては活動量、すなわちエネルギー消費量の低下が重要な要因であることを示唆したもので、今後のベトナムの肥満コントロールに新しい注意を促すものである。エネルギー摂取量に関しては、肥満している子供達は摂取量を抑制している可能性を排除できない。

以上より、審査委員会は、研究課題としての学術的重要性、研究手法の妥当性、分析・考察の深さ的確性、さらに、独創性について審査した結果、本論文はすべてにおいて高く評価でき、博士論文としての要件を十分に満たすものと全員一致で判断した。